Ⅰ．大昔の熊野（今から1500年以上昔）

この時代の熊野の様子はよく分かっていませんが、各地に人の生活の跡らしきものを見出すことができます。特に、有馬町の津ノ森遺跡では弥生土器が数多く発見され、この辺りに稲作が伝わっていたことが想像されます。大昔の熊野は、「神話の時代」でもあります。神武天皇の上陸伝説（二木島町）、秦国の人徐福の漂着伝説（波田須町）、花の窟の由来（有馬町）など、古くからの言い伝えが多く残されています。

最初の熊野びと　―津の森遺跡は語る―

私たちの熊野の地に人類が姿を見せたのはいつ頃のことでしょうか。手がかりとなるものがとても少ないので、答えは、簡単ではありません。しかし、私たちははるか古い時代を、その時代の人々が残した「生活の跡」によってさぐることができます。その主なものは土器と石器で、これらの特徴によって時代の流れを読みとるわけです。

（縄文土器）

土器でみると、古い時代のものは厚みがあり、多くの場合、縄目のような模様（縄文）がついているので、これらの土器は「縄文土器」とよばれ、使用した時代を「縄文時代」とよんでいます。この縄文土器の時代は長く、実に１万年ほども続きます。

縄文時代を過ぎると、土器は薄く、表面もなめらかになっていきます。このタイプの土器は東京都文京区弥生町で発見されたので、「弥生土器」と名づけられ、これらの土器を使用した時代を「弥生時代」とよんでいます。弥生時代は600年ほど続き、この時期に米作りが始まったと考えられています。

（弥生土器）

私たちの熊野でも、有馬町釜ノ平等の海岸からほど近い地区では縄文土器の破片がいくつか見つかり、この時代の人々が活動していたことがうかがわれます。それに対し、弥生土器は有馬町津ノ森地区で大量に発見され、ここに人々がまとまって住んでいたと思われます。実は、当時は有馬町のオレンジロードから有馬中学校にかけては一面の湿地で、そこに半島状に突き出ていた津ノ森地区は、米作りには大変都合がよかったからと考えられます。津ノ森に定住した人々は、生産にはげみ、耕地を増やし、しだいに集落を拡大していったものと思われます。人々はやがて花の窟を営み、産田神社を開き、熊野の中心としての有馬地区を形づくっていきます。こののち熊野の歴史は、津ノ森を含む奥有馬地区を軸に展開されていくことになります。

花の窟

イザナミノミコト　と　軻遇突智神

「日本を造り出した神 イザナギノミコトとイザナミノミコト。イザナミノミコトは、軻遇突智神を産みました。しかし、軻遇突智神は「火の神」として産まれてきたため、母のイザナミノミコトを焼いてしまいました。イザナミノミコトは焼け死に、その遺体は（私たちが住む熊野の）有馬の地にほうむられました。」ということが奈良時代に成立した古い書物「日本書紀」の最初の場面に書かれています。

花の窟は熊野三山の根源

花窟神社には神殿はありません。高さ 45m もある大きな岩を御神体とする大昔の信仰の形が残っています。花の窟の神は、かつて熊野灘沿岸の海神でもありました。そのため、古くから「花の窟は漁民の葬送の地」といわれました。

御神体の大きな岩から少し離れた所に高さ 12m 程の岩があります。この岩は軻遇突智神を祀ったもので「王子の岩屋」と呼ばれています。

はるか昔よりイザナミノミコトをまつり、「土地の人たちは、花が咲く季節に花を飾り、のぼりや幡旗を立て、笛、太鼓を鳴らし、歌い踊って祭りを行なう」風習があったといいます。このことから「花の窟」の名がつきました。熊野三山（本宮・速玉・那智）の中心である本宮大社は、イザナミノミコトの子である家津御子神を祀っていて、今も花を飾って祭りが始まります。このことからも分かるように、「花の窟」は熊野三山の根源ともされ、古代信仰の重要な意味を持った場所なのです。

（花の窟）

紀州の殿様から贈られた石碑

花窟神社の鳥居の横に緑色の石があります。

５代紀州藩主だった徳川吉宗が８代将軍となったため、紀州藩の親戚で西条藩の２代藩主松平頼致が第６代紀州藩主となり、徳川宗直を名乗りました。藩主となった徳川宗直は、紀ノ川で採れる貴重な緑色片岩に「花の岩屋」と刻み、花の窟に寄進したものと伝わっています。この石は、和歌山城の石垣や京都の二条城の庭石にも使われています。

（「花の岩屋」と刻まれた石碑）

お綱かけ神事

「日本書紀」に記されていることが、今に引き継がれて２月２日と10月２日に多くの人が集まり「お綱かけ神事」が行なわれています。

２月２日・・・豊作をお祈りする祭り
10月２日・・・収穫を感謝する祭り

長さ180mの綱は、わら縄７本を束ねたもので、花や扇を結びつけた３つの縄旗がつるされています。この縄旗は、かつては朝廷から毎年この神社に納められた「錦の旗」でした。しかし、ある年、錦の旗を積んだ船が洪水にあい難破したために、旗は届かないという事態となりました。土地の人たちはあわてました。急いで縄で幡旗をこしらえて錦の旗の代わりとし、これが今のような神事になったといわれています。

江戸時代の有名な国学者 本居宣長は「紀の国や　花のいは屋に引く縄の　長くたえぬ里の神わさ」の歌を詠んでいます。

（花の窟の御神体の岩）

（王子の岩屋）

（燈籠峯から鬼ヶ城を望む）

おはなし

よみがえりの地

有馬の地にほうむられた女神イザナミノミコト

花の窟に伝わるおはなしにあったように、母のイザナミノミコトは火の神 軻遇突智神を産む時に、火にまみれ死んでしまいました。そして、その遺体は有馬の地にほうむられました。このことは、「日本書紀」に書かれています。

（花の窟）

変わり果てたイザナミノミコト

イザナミノミコトは、軻遇突智神を産んで亡くなりました。なげき悲しんだ夫のイザナギノミコトは、死者の国である「黄泉の国」に行き、イザナミノミコトを探し、見つけ出しました。イザナギノミコトはこの世に戻るようお願いしました。それに対してイザナミノミコトは、「私はもう黄泉の国の食べ物を食べてしまいました。私も戻りたい。黄泉の国の神と相談しますから、その間、私を決して見ないで」と。しかし、あまりにも時間がかかったため、イザナミノミコトとの約束を破り、イザナミノミコトの姿を見てしまいました。恐ろしい形相のイザナミノミコトの体にはウジムシがたかっていました。「恥をかかされた」とイザナミノミコトが怒り、黄泉の国の女たちに命じてあとを追わせます。この女たちは鬼でした。

死者の国・黄泉の国からよみがえったイザナギノミコト

この鬼たちを追い払うため、イザナギノミコトは身に付けていた蔓草や櫛を投げつけます。しかし、それでは時間をかせげても追い払えず、それで十拳剣をふりかざします。それでも鬼たちはしつこく追いかけてきます。霊力があり邪気を払うという桃を最後に投げつけました。イザナギノミコトは、桃を鬼たちに投げつけたことによってこの世の国に舞いもどることができました。イザナギノミコトが、「黄泉の国から帰った」ことから、「黄泉から帰る」、「よみがえる」という言葉ができました。こうして熊野は古来より「よみがえりの地」として多くの人々の信仰を集めてきました。

死者の国である黄泉の国からよみがえったイザナギノミコトは、身を清めます。左目を洗うと皇室の先祖とされる天照大神が生まれました。右目を洗うと月読命が、鼻を洗うと須佐之男命が生まれました。

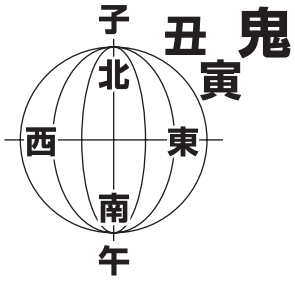
おはなし

鬼の話

鬼はどこにいるの？

熊野には、「鬼」の字が付く地名がたくさんあります。鬼はある方角にいると言われています。さて、鬼のいる方角はどこでしょうか。

答えは、「北東」です。この北東は、「丑寅の方角」と呼ばれ、「鬼のいる所」ということで“鬼門”と言われます。「丑寅の方角」には、鬼がいるというので、家を建てるときは、「鬼門」を気にかける人が少なからずいます。鬼門にあたる所には、「難を転じて欲しい」と「南天」を植えたり、「柊」を植えたりします。

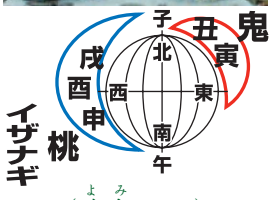


（鬼のいる方向）

徳川家康は、自分のお城 江戸城を災いから守るために鬼門にあたる所に寛永寺を建て、鬼門と反対の方角の「裏鬼門」にあたる所には増上寺を建てています。赤木城を築いた城作りの名人 藤堂高虎も津城を築いたとき、災いから城を守るために鬼門にあたる所に津観音を建立しています。

話を戻します。鬼は「丑寅の方角」にいると言われます。鬼の姿を思い起こしてみましょう。鬼は丑寅の方角にいるので、頭には丑の角があり、寅のパンツをはいているのです。

さて、前のページの話の続きです。追ってきた鬼に向かってイザナギノミコトは桃を投げつけました。鬼のいる所からイザナギノミコトが桃を投げつけた所の方角を考えましょう。イザナギノミコトがいた所は、鬼門の反対の方角なので「裏鬼門」と呼ばれる方角です。桃を投げつけた所は、「申酉戌」の方角です。桃太郎のお供に付いてきたのは猿、キジ、犬になるはずですね。



（黄泉の国）

花の窟の鬼門はどこ？

花の窟の鬼門はどこなのか、スマートフォンのコンパスを使って探してみました。鬼門は、北東の「丑寅の方角」ですね。御神体にスマートフォンを向けました。面白いことが分かりました。花の窟の鬼門には「鬼ヶ城」（鬼の岩屋）がありました。しっかり鬼がいました。

産 田 神 社

（産田神社）

有馬町奥有馬に、この土地にに住む人たちがはるか昔より大切にしてきた産田神社があります。「紀伊続風土記」には、「産田神社は　口有馬、奥有馬、山崎の三か村の産土神である。」と記しています。「産土」の「うぶ」とは、出産を意味する言葉で、「産土」の「な」は古い語で、土地を意味します。つまり、全てのものを産み出す土地の神を意味しているのです。農耕民族にとっては稲作の豊作と、住民の安全を祈る神なのです。

イザナミノミコトと軻遇突智神を祭る

産田神社は弥生時代からの古い神社で、イザナミノミコトとその子 軻遇突智神を祀っています。産田神社の名前は、「イザナミノミコトが、この熊野の地で軻遇突智神を産んだ」との伝説からつけられたといわれています。日本に米作りが伝えられた頃からこの神社があったと考えられており、古い土器もたくさん見つかっています。

古代の神社には建物がありませんでした。石で囲んだ台にしめ縄を張り、神を招いたそうです。この神の宿る所を「神籬」といい、また、神に供える米、もち、肉のことも「神籬」といいます。産田神社の社の左右にある石の台がそれです。日本では東北地方に１ヵ所、そしてここ産田神社の２ヵ所しか残っておらず、大変古くて珍しいものです。

（神　籬）

産田神社の神官は“榎本”氏

産田神社の神官は、大和朝廷が熊野地方で任命した「国造」と呼ばれる役人の子孫とされる「榎本氏」が代々引き継いでいました。榎本氏は、鈴木氏、宇井氏とともに熊野三苗といわれ、熊野地方で一番古い氏です。15世紀初め、和泉守忠清のとき、産田神社が所在する地名の「有馬」氏を名乗り、南は南牟婁郡御浜町阿田和から北は尾鷲市行野浦までを支配する豪族となりました。しかし、16世紀末、有馬孫三郎が25才の若さで亡くなると有馬氏に跡継ぎがなくなり、対立していた新宮の堀内氏虎の次男を有馬氏の跡継ぎに迎えました。まだ8歳と幼い氏虎の次男は、「有馬忠勝」を名乗りました。忠勝は、兄 堀内氏高が亡くなると、新宮の城に戻り「堀内氏善」を名乗り、ここに有馬氏はなくなりました。（P 39“有馬氏の内輪もめ”、P 42“堀内氏の台頭”を読もう！）

熊野三苗・・・榎本、鈴木、宇井

ホウハン

産田神社では、1月10日の弓引き神事、11月15日の厄除け祭があります。

この厄除け祭のとき、「ホウハン」という特別な膳が出て、有馬に住む氏子たちが食べます。ホウハンをいただくと厄落としが出来るとかいわれています。

「ホウハン」の献立

❶ 汁かけ飯　　＊米の飯に白味噌汁をかけたもの。

❷ 骨付きのさんま寿司

❸ アカイ　　＊生魚の切り身を唐辛子であえたもの。

（ホウハン）

“台風が教えてくれた”産田遺跡

1959年（昭和34年）9月26日、この地方を巨大な台風が襲いました。台風は和歌山県潮岬（串本町）に上陸後、紀伊半島をさかのぼって名古屋市周辺を襲い、死者5000人以上を出す大災害となりました。これが有名な「伊勢湾台風」です。

この日、熊野地方は夜中から激しい風雨にさらされて、家々の屋根瓦が吹き飛ばされ、川がはんらんし、山くずれがいたるところで発生しました。強力な風は神社にそそり立つ大木さえ大きくゆさぶりました。熊野の人々は、荒れ狂う風や波の音をおびえ聞きながら、眠れぬ夜をすごしました。

（岡本実「写真集『熊野』」伊勢湾台風の被害 磯崎町）

翌朝、おそるおそる家からはい出た人々は恐ろしい光景を目にしました。折れた木々、傾いた電柱、堤防は押し流され、見わたす限りの田畑はにごった水の下にありました。このとき、有馬町の産田神社にある樹齢（木の年齢のこと）数百年の杉の大木が根こそぎ倒れるという事態が発生しました。

付近の人々は急いでかけつけ、被害の様子を確かめました。大木の根元は大きくえぐられ、付近にはおびただしい折れ枝が散乱していました。親子代々にわたって大事に守ってきた御神木です。ありさまを目の当たりにした人々は、思わず落胆の声をもらしました。

しかし、そのとき偶然、誰かがえぐられた大穴の中に白石が大量に埋まっているのを見つけました。注意深くさぐると、その中から土器らしいかけらも多く見つかりました。

その後の調査により、土器は弥生中期（今から約2000年前）のものと判定され、この神社が、水稲栽培、つまり米づくりが日本に伝わってきた当時すでに建てられていたことが分かってきました。また、付近の田畑からも弥生土器が連続して発見されました。

これまで産田神社は、相当古い時代からの神社であることは誰もが認めていましたが、はっきりした年代は分からないままでした。台風災害という不幸なできごとによってこの地域が熊野地域で最も早くから水稲栽培が始まった地域であることが分かったのは、なんとも皮肉なことでありました。

（産田遺跡）

おはなし

古代のロマン「徐福伝説」

徐福の里・波田須

ＪＲ波田須駅から海に面した道を約300ｍ歩いていくと、大きなクスノキの森が見えます。そこには波田須の人たちが大事に守ってきた「徐福神社」があります。

始皇帝と徐福

中国の秦の国のこと。12歳の若さで秦の王様になった人がいます。この王様は、周りの６つの国を次々と滅ぼし、紀元前221年、戦国時代の中国を初めて統一することに成功しました。この王様は、中国統一を実現したことで「始まりの皇帝」になったのでした。それで、この王様は「始皇帝」を名乗るようになりました。始皇帝は、皇帝のもとに力を集める政治（中央集権）を行い、文字や貨幣、そして物をはかる単位を統一しました。また、北方の異民族の侵入を防ぐために、「万里の長城」を築きました。始皇帝の力は、それは偉大で、自分の願いを次々とかなえていきました。

６つの国を滅ぼした始皇帝は、自分の国 秦が滅びることのないように真剣に考えました。「秦の国を守り続けるには、自分が長生きすることが一番だ」という結論を出すと、長生き出来て、死なない薬（不老不死の薬）を探すよう命令を出しました。始皇帝の家来の情報によると、徐福という者が不老不死の薬の在りかを知っているということでした。始皇帝はさっそく徐福を呼び出しました。

徐福は「東海（日本の方向）の国に仙人の住む神聖な山（蓬莱・方丈・瀛州）があり、そこに不老不死の薬があります」と話しました。始皇帝には大変興味深い話で、「どうすれば、その薬が手に入るか」とたずねました。「男女の子ども3000人と、それらの者が乗り込むことが出来る大きな船を造り、仙人への贈り物としての金・銀・珠玉を船いっぱいに積み、それらを私に授けていただけるのなら、東海（日本の方向）の国に行き、不老不死の薬を探して参ります」と徐福が答えると、さっそく、それらのものを準備させました。徐福は、たくさんの宝を積んで東海の国に向けて出発しました。しかし、二度と中国にもどりませんでした。

波田須に残る「徐福伝説」

徐福伝説は、全国に30カ所以上あります。その伝説は、波田須にもあります。徐福らが乗った船は黒潮に乗り、たどり着いた先が波田須でした。徐福は、捕鯨、タバコの栽培、紙のすき方、薬草、焼き物、機織り、土木、造船、橋をかける技術、建築などの数々の中国文化を伝えたといわれています。「秦の人たちが住む土地」というところから「秦住」の名前がつき、現在の「波田須」になったといわれています。

半両銭の発見

1960年（昭和35年）頃、徐福神社近くの道路を工事していると、土の中から、秦の始皇帝が発行した貨幣「半両銭」と見られる古銭７枚が見つかりました。日本国内では、18枚の半両銭が発見され確認されています。神社には徐福が残したと伝えられている御神宝の「すり鉢」もあり、地元の人たちによって長年大切に守られてきました。

（半 両 銭）

（蓬莱山にある徐福の宮と徐福の墓）

新井白石も認めた徐福の里「波田須」

江戸時代の有名な学者に、新井白石がいます。新井白石は、江戸幕府の６代将軍 徳川家宣、７代将軍 徳川家継と、２人の将軍の政治を手助けした人でもありました。この新井白石は、自分の書いた本「同文通考」の中で「熊野に秦住という土地があり、この地は徐福が住まいをおいた土地である」と述べています。

（徐福を蓬莱山の宮に祀っている）

（御神宝のすり鉢）

（徐福伝説のある所）

徐福伝説の地　一覧

青森県北津軽郡中泊町（尾崎神社・熊野神社）
秋田県男鹿市　（赤崎神社）
東京都青ヶ島　（織物）
東京都八丈島　（織物）
神奈川県藤沢市　（妙善寺）
山梨県富士吉田市
　（甲子神社・聖徳山福源寺・富士古文書）
山梨県南都留郡河口湖町　（浅間神社・徐福社）
山梨県南都留郡山中湖村　長池村
山梨県・静岡県　富士山
　（富士山＝蓬莱山、不死山）
静岡県静岡市清水区三保松原
愛知県豊川市小坂井町　（蒐足神社）
愛知県名古屋市熱田区
　（熱田神社境内＝蓬莱山・雲見山）
三重県熊野市波田須町　（徐福神社）
和歌山県新宮市
　（徐福公園、徐福宮、阿須賀神社）
京都府与謝郡伊根町　（新井崎神社）
広島県廿日市市宮島町（厳島神社、聖崎蓬莱山）
山口県下関市豊北町　（土井が浜）
山口県熊毛郡上関町祝島
高知県高岡郡佐川町　（虚空蔵山）
高知県土佐市
高知県須崎市
福岡県筑紫野市　（天山）
福岡県八女市　（童男山古墳）
佐賀県武雄市山内町　（黒髪山）
佐賀県伊万里市波多津町　（焼き物）
佐賀県武雄市　（武雄温泉）
佐賀県佐賀市諸富町　（浮盃）
佐賀県佐賀市金立町　（金立公園・金立神社）
佐賀県佐賀市富士町　（古湯温泉）
佐賀県神埼市神埼町・吉野ヶ里町
宮崎県延岡市　（蓬莱山・徐福岩）
宮崎県宮崎市住吉　（はまゆう）
鹿児島県南さつま市坊津町
鹿児島県いちき串木野市　（冠岳）
鹿児島県　屋久島
鹿児島県　種子島

おはなし

神武東征を今に伝える「二木島祭」

二木島湾入口の東の岬を英虞崎といい、西の岬を牟婁崎といいます。牟婁崎には室古神社が、湾をへだてた英虞崎には阿古師神社があります。ここには「神武東征」の言い伝えがあります。

「神武天皇は、九州の日向国（宮崎県日向市）をたち東征のときに、熊野灘で暴風雨にあいました。漂流しているところを二木島の漁師が舟を出して助けました。しかし、神武天皇の２人の兄はこのときに亡くなり、それぞれ室古神社、阿古師神社に祀られた」という言い伝えです。このときのことがきっかけとなり、舟こぎ競漕の勝敗で、豊漁か不漁かを占う行事となり、二木島祭になりました。昔は、年２回祭が行なわれていました。

二木島祭は、完全な当屋祭で、この祭の大きな特徴の一つです。当屋とは、一般に祭を取り仕切る責任者のように言われますが、二木島祭の当屋は、毎年氏子の中から２人選ばれ、その人が神官となり、神事をとり行ないます。ひとたび当屋となれば、約１年前から、神への奉仕が始まり、宵宮、例祭と、仕事は大変です。当屋は、豊漁のお祈りと海に感謝する神事いっさいを行ないます。

祭の見どころは、何と言っても、２隻の舟による舟こぎ競漕です。当屋の前の浜から出発し、室古神社の船着場で出会い、儀式を挙げ、阿古師神社に向かいます。このとき舟に張られた幕をあげ、甫母浦まで競漕があり、最後は、二木島里浦の拝の浜から二木島東前まで３回の競漕を行ないます。この二木島祭は、毎年11月３日に行なわれてきましたが、現在は神事のみとり行われています。

（二木島祭・船こぎ競漕）